

生命を守り、未来を作るために 農業支援を始めます



ガザ農業の現状

ガザは、年間降雨量が200ミリ前後、夏は暑く冬に冷たい雨が降ります。穀物はあまりとれませんが、野菜や果物はほぼ自給できます。農業人口はガザの総労働人口の15%です。ガザ地区の農業用地は175,000ドノム(175Km²)ありますが、少なくともその25～30%がここ8年の間、イスラエルの戦車やブルドーザーにより破壊されました。ガザの農業は都市型農業で、現在18,000の温室が存在しています。農地は非常に限られ、また水資源は貧弱な上に、汚染されています。

イスラエルとの境界線に沿って、イスラエルの安全保障確保のために「バッファゾーン」という無人地帯が幅600メートルにわたって作られています。この地域はもともと農地で、ガザの農地の25%にあたっていました。武装勢力が果樹園や農地を利用してロケット弾を発射するのを防ぐという理由で、果樹はすべて切り倒され、その結果ガザの柑橘類の生産

量は、10年間で10分の1に減っています。バッファゾーン地帯の航空写真を1999年と2004年で比較すると、1999年には緑色だったこの地域が2004年の写真では灰色になっていることがよく分かります。

昨年暮れから今年初めのガザ攻撃のあいだ、また、それ以前からの封鎖の中では非常に厳しい食糧不足がありました。特に爆撃が始まった最初の一週間、ちょうど年末年始の時期、多くの家庭で食糧が底をつき、飲まず食わずの生活を強いられた人がたくさんいました。「食糧の確保は生命の確保である。自分たちにとってたいへん大事なテーマだ。自給することを考えなくてはいけない」とガザの人たちはみな実感していました。ガザの自給率は、野菜中心で4割ぐらい。日本とあまり変わりません。

種子バンクとは何か？

世界中の種子はアグロビジネスと呼ばれる巨大な農業企業が支配している。ガザにおいてもほとんどの種子はイスラエルから入ってきています。と

ころが封鎖によって種子さえ入ってこない状況が続く、それなら自分たちで種子を探ろうということがはじまりました。また、市販の種子は収穫量は多いけれども、病気に弱いか、その土地に合っていないということもあり、在来種の種子を自分たちで作ろうとしているのです。

ガザでは野菜栽培が盛んですが、多くの種類の野菜の種子を自家栽培して、保存し、広めようということ、5年ほど前にガザ南部のラファで一人の女性が始めました。彼女はいつもバッグに種子を入れていて、知り合いに会うと配っていたそうです。その女性ウンム・ムハンマド(ムハンマドの母さん)は昨年亡くなりましたが、女性たちのグループがその遺志を引き継いでいます。アハラムさんという30代の女性が中心になって、日本で言う「村おこし」の活動をしているグループの事務所には、小袋に分けられたさまざまな種類の野菜の種が壁に貼ってあって、実費で販売されています。このプログラムにはすでに、多くの女性たちが参加して、それぞれの自家菜園

で種子を作っていました。

このガザ南部の女性グループを支援し、現地の農業専門家の指導の下、栽培し貯蔵する種子の質を確保し、販売できるレベルにすることが「種子バンク」プロジェクトの当面の目標です。種子を採取する野菜の栽培、種子の採取、選別、乾燥、保存、包装、また「こうした事業に協力ください」という広報や啓発活動などについて、女性たちは技術を必要としているからです。

ウンム・ムハンマドさんの家に行きました。夫のアブ・ムハンマド(ムハンマドの父さん)も「篤農家」で、農地面積は狭いのですが、よく手入れされた畑の他、魚を飼育する池もあり、伝統的で有機的な栽培を進めています。一般にガザやパレスチナでは集約的な農業はあまり見かけないこともあり、成功例として有名です。

封鎖があっても攻撃があっても、占領の中で人々が生き延び、生活を持続させていくことでしか平和は確保できないという強い意志を持っている人たちがたくさんいました。また、パレスチナが分断され、西岸から切り離されていく危機的な状況を多くの人が強く感じていることがよく分かりました。

ジュース工場

ガザ産の加工食品はないかと食料品店で探していたら、トマトケチャップを見つけました。その工場は、今回の攻撃でほとんど破壊されたガザ北

部の工業地帯の真ん中で、稼働を続けていました。もともと、イタリアの援助で作られた本格的なジュース工場で、十メートルを越す濃縮塔がそびえています。そのステンレスの細かいパイプには無数の銃弾の穴が開いているのですが、それを一つ一つ溶接で埋めて、組み立てなおしているところでした。ようやく6割ぐらい修復されましたが、修理に今年いっぱいかかるそうです。工場内部も巨大なステンレスの圧搾機やベルトコンベアが破壊されています。今少しずつ直している途中で、とても気の遠くなるような作業をしながら、3割程度の稼働率という作業を見せてもらいました。

トマトケチャップはほとんど手作業で作っていて、ペットボトルに詰めています。経済封鎖で、ガザにはガラス瓶やペットボトルの材料が入ってきません。このペットボトルをつくる設備もエジプトからトンネル経由で運んできたそうで、大きすぎてトンネルに入らない機械を、切断して運び、溶接して組み立てたそうです。

人工的な添加物は使っていないというジュースやケチャップは、結構おいしいと私たちは思いましたが、ガザの人に言わせると物足りないということでした。安いエジプト製品や大きなシェアを占めるイスラエル製品とマーケットで競争するのはなかなか大変なようで、ガザの中で少しずつ再建され

ている経済活動をいかに支援すべきだろうかと思いました。

病院で

ガザの侵攻が始まる1週間前の去年12月中旬、パレスチナ子どものキャンペーンでは、ノルウェーのNGO、ノルウェー救援会のビョルクリードさんを日本に招いてシンポジウムを開いていましたが、その場ではノルウェーのガザ支援として、医療用の酸素工場のことが話題になっていました。今回、彼の案内で、ノルウェー救援会のガザでの支援活動も見えてきました。たいへんユニークな活動をしていました。

ガザで唯一本格的な大手術をすることができるシファ病院の構内に「酸素ボンベ工場」の一つがありました。空気を圧縮して取り出した酸素をボンベに充填したり、入院病棟のベッド脇へパイプで供給したりしています。戦争中も24時間体制で稼働し、医療用の酸素は十分に間に合ったということでした。こうした酸素工場がガザにもヨルダン川西岸にもたくさんあるそうです。ノルウェー救援会はまた、病院のパジャマやシーツなどの洗濯工場も支援していて、地味だけれど不可欠な分野を支えていることがよく分かりました。今後、人数は多いけれども技術水準が低いガザの医療従事者の再教育を考えているということでしたが、私たちの支援の方向性を考える上で非常に示唆に富むものでした。

子どもの人権に関するNGOであるDefence Children Internationalのパレスチナ支部によると、今年の停戦以降、バッファゾーンにいてイスラエル軍の発砲で殺された子どもは7人に上ります。その中には、遊んでいた子ども、家族とイチジクの収穫をしていた子どもなどが含まれています。